厚生労働科学研究費補助金（新興・再興感染症及び予防接種政策推進研究事業）分担研究報告書（R6）

沖縄県における成人の侵襲性細菌感染症のサーベイランス

研究分担者 仲松 正司 琉球大学大学院 感染症・呼吸器・消化器内科学

【研究要旨】 侵襲性肺炎球菌感染症(IPD)、 侵襲性インフルエンザ菌感染症(IHD)、 侵襲性髄膜炎菌感染症(IMD)、 劇症型溶血性レンサ球菌感染症(STSS)の沖縄県内での発生動向を解析するとともに、沖縄県全体でのサーベイランス体制を構築し今後の感染症対策に備える。

A) 研究目的

沖縄県は日本最西端に位置し亜熱帯機構の県である。アジアの玄関口として台湾や中国をはじめとした東アジア、東南アジアの国々との交流が活発である一方、米軍基地が存在するなど日本本土とは気候や環境が異なる。そのため感染症においては菌種や流行パターンが日本本土とは異なる事が予想される。本研究では感染症法に基づく届け出を元に、侵襲性肺炎球菌感染症 (IPD)、侵襲性インフルエンザ菌感染症 (IHD)、侵襲性髄膜炎菌感染症 (IMD)、劇症型溶血性レンサ球菌感染症 (STSS) の沖縄県内での発生動向を解析するとともに、県内の人的ネットワークを構築し今後の感染症対策に役立てることが目的である。

B) 研究方法

微生物検査室を有する県内 15 医療機関の医師と微生物検査技師、沖縄県衛生環境研究所、沖縄県地域保健課間で、サーベイランスのためのネットワークを構築した。各施設協力の元に 4 疾患の菌株や調査票を収集し、解析を行う。解析結果は定期的に各医療機関や行政にフィードバックを行う。

（倫理面への配慮）

症例調査に関しては匿名化を図り、患者のプライバシーが守れるように配慮する。菌株の収集に関しては倫理的な問題はないと判断する

C) 研究結果

（IPD）沖縄県で分離される肺炎球菌の血清型は、15A、10A、19A 型が多く、近年は 35B も増加傾向である。2024 年度のワクチンカバー率は PPSV23、PCV20 で 44%、PCV15 が 11% と 2023 年と比較し、カバー率が低下していた。

（IHD）2024 年度は 11 例解析した。病型は大多数で菌血症と肺炎の合併症であった。莢膜型は全てで Non-typable であった。

（STSS）。2024 年は 22 例解析され、A 群 7 例、B 群 7 例、G 群 8 例だった。壊死性筋膜炎

が8例でみられていた。

(IMD) 2024年度は3例解析が行われた。血清型はY2例(血液から分離)、B1例(喀痰から分離)であった。血清型Bではキノロンに非感性であった

D) 考察

IPDの肺炎球菌血清型は近年ワクチンに含まれていない15A、35Bが増加している。15Aはペニシリンやカルバペネムに低感受性を示すことが多く、感受性結果でもペニシリン非感受性率やカルバペム非感受性率が増加している。今後の動向を注視したい。

新型コロナウイルス感染症流行が始まった2020年度以降、IPD、IHD、STSSとも報告数は激減していたが2022年度以降報告数が増加しており、2024年度はIHD、STSSで法ウ国数の増加が顕著であった。

2024年度から沖縄県・衛生環境研究所関係部署担当者と連携を強化し、菌株・調査票回収耐性を強化体制の再整備を行った。

E) 結論

2024年度サーベイランス体制整備の再構築を行った。2022年以降、IPDやIHD、STSSの報告数は増加しIMDの報告も見られるようになっていて、今後ますます本サーベイランスの役割は重要になると考える。